

---

# 狐の苦いシロップ

風亜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

狐の苦いシロップ

### 【Nコード】

N0937N

### 【作者名】

風亜

### 【あらすじ】

死よりも辛い生か、残酷な死か。

飢えに苦しむ一匹の狐は、選択を迫られます。

## （前書き）

この小説は、  
ブーランクの『クラリネットソナタ』第二楽章をモデルにしています。

（動物の擬人化にご理解のない方の閲覧はお控えください。）

（俺は、……ここで死ぬのか……？）

冬の空は、温かい日差しが時折、雲間から降り注ぐとも、どこか物憂げだった。

吹き抜ける風は冷たく、ひんやりと肌を撫でる。

生気が尽き果て、花も木も、冷たい風と雨に促され、

誰にも見向きもされないが、ひっそりと眠りにつこうとしている。

そしてまた、延々と広がる人気のない荒れ地を、

ふらふらと覚束ない足取りで歩いている一匹の狐も、

その命を終えようとしていた。

（……つ、きつと、もう少し歩けば、餌にありつけるはずだ……。）

そう思いながらも、心の何処かでは、

もう餌にありつける事は無いだろう、と悟っていた。

そこは、人も、他の生き物もない、荒れ地だった。

人間の手が入るのを拒むように、

噓せ返るような死の臭いを放つそこには、

枯れ木が数本と、木から落ちた茶色の葉っぱだけしかなかった。

餌など、あるはずがない、分かってはいた。

運良く水にありつけたとしても、それは、死の水だ。

飲んではいけない、飲むと、身体の内側から痺れ毒が回っていき、

身体感覚がじわじわと無くなっていき、あまり苦しみはしないが、

ゆっくりと死に至るのだ。

そして、死に至る直前、すっかり全身の感覚が消え失せた頃、

走馬灯のように、今までに自分が一番思い出したくない事が、

何度も、何度も駆け巡り、後悔や悲しみの中で死を迎える、

出来れば、味わいたくない痛みだった。

狐は先程から、極度の疲労から、ピタリと足を止め、

その泉の前で立ちすくんでいたのだ。

飢えに苛まれ、絶え間ない空腹を味わい、この世界を恨みながら死ぬか、

感覚が無くなる代わりに、あの忌まわしい思い出を胸に抱いて死ぬか。

しかし、目の前にある泉からは、死をもたらすとは到底思えない、食欲をそそり、とても美味しそうな、甘い匂いがした。

狐には、それが死の甘美な誘惑だと分らなかったのだ。

それほどに、狐は飢えていた。

たった一滴の水すらも、今の狐にとっては、天上の甘露のようであった。

……ゴクリ、狐は生唾を飲み込んだ。

（俺は、……っ、畜生、……こんな所で……。）

狐は今、孤独だった。

自分の死を誰も看取ってくれない事が、この上なく、悲しかった。

沈みゆく夕日が、狐を優しく照らし出すが、それでも、

孤独は収まるどころか、一層大きな炎となり、狐の心を焦がしていた。

同情も、慰めも、有難く受け止める事が出来なかった。

狐は泉に鼻先を近付け、恐る恐る、クンクンと匂いを嗅いでみた。

すると、何とも心地の良い匂いが、鼻腔から風のように、

すうっと忍び込んできた。

それは、どんな同情よりも、どんな慰めよりも、

今の狐の心を強く打った。

吸い込まれるように、狐は泉の中に顔を埋め、その水を口一杯に含んだ。

その水は程良く甘く、狐の喉を隅々まで潤した。

と、同時に、味わった潤いはそのままに、後ろ足から前足へ、

じんわりと痺れが広がっていった。

やがて、立ってバランスを取る事が出来なくなると、

狐は、とうとう力尽きたのか、地面に突っ伏してしまった。

足から毒は広がり、全身をすっぽりと覆い、包み込んでいった。嗅覚から伝わる毒はますます甘美に、眩暈がするほどにきつくなり、遂に、瞼を開けている事も出来なくなってしまうた。

意識してみると、全身の感覚が全く無かった。

まるで、最初から無かったかのように、綺麗に消え去ってしまっていた。

ふと、脳裏を一つの絵がよぎった。

ぼんやりとしたイメージが、徐々にはつきりし、色濃く鮮明になっていく。

そうだ、これは、あの時の、……忌々しい、心が締めつけられる……。

自分が、仲間と共に緑豊かな平原を旅していた頃、あまりの空腹に襲われた時、眠っている仲間の狐を食い殺してしまった、

その時の一部始終だった。

身体中、甘美な匂いに包まれ、安らかな死へと向かっていき、もう何も考えられないくらいなのに、その映像だけは、

忌まわしき思い出は、狐の罪悪感を甦らせるように、

狐の胸をギュツときつく締めつけた。

本当は、狐も好きで仲間を殺したわけではなかった。

ただ、死ぬのが怖かったから。

生きたかったから、生への渴望が、

狐にその残酷な選択肢を選ばせたのだ。

そして、その映像は今、死を迎えようとしている今、

何度も繰り返し返され、いつまでも、狐の心に残り続けた。

その狐が命を落としてからは、ますます死の臭いがきつくなり、数週間が経った頃には、その地には一本の木も、

一枚の葉っぱも無かった。

ただ、荒れ地の中央に位置する泉だけは、周辺の土壌、死の祝福を受けた大地を通じて狐の命を吸い、

一滴も残らず生き汁を啜り、より深い藍色に染まり、  
新たに生まれる命を誘惑し、懐柔し、  
その背に残酷な刃を振り下ろすべく、  
泉の奥へ、底の無い泥沼へズルズルと引きずり込むように、  
静かに佇み、甘い匂いを放っていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0937n/>

---

狐の苦いシロップ

2010年10月21日23時30分発行